

明治大正期の女子教育者 櫻井ちか・倉辻ふきに関する研究

—「櫻井女塾」創立以前とその家族など—

遠藤 由紀子

1. はじめに

明治31年(1898)、「櫻井女塾」が創立された。場所は、東京府本郷区向ヶ岡弥生町(現、東京都文京区)、初代塾長は櫻井ちか(1855~1928年、知嘉とも)、2代塾長は倉辻ふき(1879~1945年)であり、「その昔女子の英語は津田か櫻井かとまで世の信用を博した」(塚本編1941:22)といわれる名門校であったが、日本女子高等学院(現、昭和女子大学)に合併され、現在学校は存在しない。

筆者は、「櫻井女塾」の展開及び日本女子高等学院との合併の経緯、時期などについて調査した(遠藤2021)が、その調査中、櫻井ちか・倉辻ふきの経歴に関して、従前の研究には記載されていない事柄をいくつか検証し得た。ちかの経歴や功績に関しては、櫻井淳司氏(櫻井編1976)、千住克己氏(千住1982)がこれまで調査・研究をしており、他に小林恵子氏(小林1982)¹、加藤澄江氏・川島麻由美氏(加藤・川島1987)²などによる研究がある。しかし、ちかの養女ふきに関する研究は、管見によればこれまでなかった。

本論文では、主にふきの経歴を明らかにすることと、ちかに関してはこれまで判然としていなかった事柄や従前の研究には記録のない功績について報告することを目的とする。主に明治大正期に女子教育に携わったちか・ふき母子の経歴・功績を辿ることで、近代以降の女子教育の一端を担った一族を記録に残し、当時の女子教育者の思想や方針、時代背景を知る手掛かりとしたい。なお、本論文では物故者の敬称は省略し、資料の漢字表記は概ね原典通りとし、仮名遣いは原文のままとした。

2. 櫻井昭恵・ちか夫妻とふきの幼少期

「倉辻ふき」³は、旧姓「櫻井ふき」といい、明治12年(1879)12月生まれである(人事興信所編1941:ク53)。ふきは、生後間もなくから、実子のいなかった櫻井昭恵^{あきのり}・ちか夫妻に育てられた。これについて、明治13年(1880)のはじめ、「宮城家の次女ふきを生まれおちるとすぐに迎え入れて入籍した」(千住1982:34)とあるが、ふきの孫にあたる櫻井淳司氏には「当時牧師であった櫻井家の玄関に赤ん坊が置かれており、それが祖母であった」とも伝わっている⁴。

1 小林氏の関心は、草創期の幼稚園や保姆養成(幼稚保育科)にあり、ちかの経歴に関しては櫻井女学校附属幼稚園創立後の北海道移住までが述べられている。

2 加藤氏・川島氏による論文は、近代の食形成に一役を担った女性としてちかを紹介しており、ちかが明治期の女性雑誌に寄稿した料理法についての調査であった。

3 『人事興信録』には「フキ」と示されるが、自らが寄稿した雑誌や同窓名簿には「ふき」とあるので、本論文では平仮名で表記する。

4 令和2年(2020)7月19日、櫻井淳司氏自宅(福島県石川町)での聞き取りによる。当時、コロナ禍による越境の自粛要請中であり、聞き取りを遠隔で実施した(聞き手 遠藤教之氏、遠藤紀美氏、関根美枝子氏)。淳司氏の著作にも「櫻井女学校の玄関先に捨て置かれた「捨て子」だという話」(櫻井1993:17)との記述がある。

櫻井夫妻は、明治5年(1872)に結婚した。昭恵27歳、ちか17歳であった⁵。海軍士官の昭恵は、結婚後も開拓使の安藤丸の船員として北海道に滞在していた。長いこと一人で家に残されることの多かったちかは、「夫の友人より、齋藤つね子⁶といふ人が芳英社といふ女学校を立てたから(明治4年)、そこで英語を學んではどうかといはれ、夫も大に賛成して、其學校に寄宿しました。」と回想している。女学校の生徒は百名ほどおり、授業は上級生が下級生を教える方法だった(櫻井1928: 1)(写真1)。



写真1：櫻井ちか
(『櫻井ちか小伝』口絵より転載)

ちかも半年学ぶと下級生を教えるようになり、英文の疑問を宣教師に尋ねたことで教会と繋がりを持ち、明治7年(1874)に新栄教会にてタムソン(David Thompson)⁷から洗礼を受けた。翌年、横浜山二百十二番にある「共立女学校」⁸にて、半年程、ジュリア・N・クロスビー(Julia N Crosby)、ルイズ・H・ピアソン(Louise H Pierson)⁹から学んだとされる¹⁰。共立女学校でも寄宿し、賄いは西洋料理で食費は一か月金三円、一週に一日土曜日は日本料理(櫻井1928: 2)という生活であった。明治9年(1876)10月、ちかは「私学開業願」(「女英学、家塾開業願」とも)を文部省に提出し認可された。設置場所は東京府麹町区中六番町1番地(現、東京都千代田区四番町)、書類上の校名は「櫻井女校」とあるが、いつのまにか「櫻井女学校」と称された。創立当初の教員は女性1名、生徒は女子6名、翌年には生徒数19名に増加し、中六番町54番(現、東郷坂)の旧旗本屋敷に移転し、3年後には教員女性6名、生徒65名(内男子11名、女子54名)に増加し、寄宿舎も併設された(千住1982: 32)。

さらに、明治11年(1878)に全員通学生の「貧学校」を創設した。教員は男性1名、女性1名で、生徒44名(内男子17名、女子27名)が在籍し、ちかは午後の2時間、貧学校で教鞭を執った。だが、理由は定かではないが、貧学校は明治13年(1880)に閉校とし、同年、入れ替わるように「櫻井女学校附属幼稚園」を創立した。私立としては、日本最初の幼稚園とされている(小林1981)。

幼稚園を創立したこの年に、ちかはふきを養女として迎え、同時に一家は北海道への移住を考える

5 昭恵は大洲藩(現、愛媛県)の神官の長男、ちかは江戸の上野黒門町にて、徳川家歴代将軍の御霊屋で用いる祭式用具を扱う「神宝方」の御用達をしていた平野与十郎の長女として生まれた(千住1982: 29)。

6 詳しい経歴は不明で、当時22歳、岩手県土族下斗米文弥、浜田留松に師事した(千住1982: 30)。

7 1835~1915年。文久3年(1863)に来日したアメリカ長老教会の宣教師で、神奈川奉行所の横浜英学所で算術、地理学を教えた。

8 明治4年(1871)8月、来日した3人の女性宣教師により「亜米利加婦人教授所」として開校、翌年10月に山手212番に移転し「日本婦女英学校」、明治8年(1875)4月に「共立女学校」と改称され、発展していった。現在の横浜共立学園中学校高等学校(横浜市中区山手町212番地)である。

9 宣教師のクロスビー(1834~1918年)、ピアソン(1832~1899年)は、明治4年(1871)に米国婦人一致外国伝道協会(WUMS)により日本への伝道のため派遣され、来日した。

10 手塚論文に(ちかが)「学校史に共立出身者であるかのような談があるのは間違いである。」(手塚1967: 17)とあるが、出典根拠は不明である。確かに、ちかが櫻井女塾設立願のため東京都に提出した履歴には「明治5年4月より同9年10月まで米国婦人タムソン氏ニ従ヒ英語ヲ研習ス」(東京都編1968: 153)とのみあり、小林論文(小林1982: 36)でも指摘されている。これについて追跡すると、ちか自身が「共立女学校に入學した。」(櫻井1928: 2)と記した資料があり、更に横浜共立学園資料室に確認すると、卒業生の記録に(櫻井ちかは)「明治8年頃、英語と家庭科を学んだ」とあり、卒業生の回顧録(小島清子談)にも同窓生の名として「櫻井おちかさん(櫻井女塾を開いた)」(横浜共立学園六十年史編纂委員編1933: 221)とあるので、手塚論文の誤りではないだろうか。ちなみに、小島の回顧録には他の同窓として井深せき(明治学院2代総裁の井深梶之助夫人、女子學院教員)や岩倉使節団女子留学生として渡米したが途中帰国した、のちの上田梯子、吉益亮子の名前も挙がっている。

ようになる。すなわち、同年6月14日に、ちかは開拓使長官黒田清隆宛に「北海道札幌へ女學校設立仕度儀ニ付保護御願」を提出した。この願書は却下されたが、その後、「函館師範学校女子部」への奉職が決まると、明治14年(1881)7月14日、櫻井女學校校主の代理として矢島楯子(1833~1925年)¹¹が指名され(東京都編1961: 55~61)、ちかは、櫻井女學校の経営から離れることとなった。

明治14年(1881)7月、櫻井一家は函館に渡った。2歳に満たないふきも同行したと思われる。この頃、夫昭恵は海軍少尉を辞し、キリスト教伝道師として活動するようになっていた。ちかが函館師範学校に勤務する傍ら、昭恵は函館大町に講義所を設け布教活動に努め、翌年には19名の受洗者を得て、明治16年(1883)に「日本基督教一致函館教会」¹²を設立した(千住1982: 36)。

その後、昭恵が肺を病み、転地療養を医師に勧められ、明治17年(1884)11月には函館を去り、板垣退助の要請¹³により高知市で布教活動を行った。翌年春には、昭恵の郷里である愛媛県大洲に移ったが、大洲での布教活動は困難を極めた(櫻井1892b: 1051)。すなわち、神官や僧侶などが「耶蘇退治」と称して徒党を組んで暴行を働き、投石や反対運動の演説などが盛んに行われたようで、昭恵のわら人形を作り、彼を祈り殺すと祈念を行ったものもあった(櫻井1996: 119)。

迫害されながらも、昭恵は「大洲教会」を設立した。教会は現在も存続しており、大洲教会礼拝堂でのコンサートのパンフレット¹⁴には「大洲教会は、1887年3月27日に大洲出身の牧師櫻井昭恵や宣教師アレクサンダー(アメリカ合衆国長老教会)らの伝道で導かれた信徒達によって設立されたプロテスタントの教会です」¹⁵と説明されている。大洲では5年間過ごしているが、この間、ちかは、アメリカ北長老教会宣教局のミッションスクールとなる「大坂一致女學校」¹⁶の設立計画を女性宣教師A. E. ガーヴィンより相談され協力した(櫻井1892b: 1052)。

ふきも両親の活動を間近で見ていたと思われるが、ふきに関する記録は残っていない。明治23年(1890)、昭恵は日本基督教会浪華中会より福井県敦賀に転属となり、同年、ふきは母の母校である横浜の共立女學校へ入学することとなった。

3. ふきの少女時代

明治23年(1890)、12歳で親元を離れ、共立女學校に入学したふきは、18歳まで寄宿生として過ごした。ふき自身が、女學校時代を回想した記録が『横濱共立學園六十年史』に残っている。それによると、女學校には従妹の川添みつと一緒に入学したそうで、両親の元を離れるのは幼心に心細く感

11 熊本藩総庄屋に生まれる。富豪の林七郎の後妻となるが35歳で離婚し、明治5年(1872)に上京、教員伝習所で学び新栄女學校教師となる。明治6年(1873)に受洗、明治14年(1881)に櫻井女學校を引き継ぎ、明治22年(1889)に櫻井女學校と新栄女學校を合併させ、女子學院(現、女子学院中学校・高等学校)とし、楯子は初代院長に就任する(守屋1923)。

12 教会は、現在「函館相生教会」として存続している。沿革には「函館師範学校(現在の道教育大函館分校)の英語教師櫻井ちかの夫櫻井昭恵が明治16年、同地に教会を設立したのに始まる。同23年には教会内に共愛倶楽部を設け、職業指導あるいは禁酒運動を展開。」(函館市史編さん室編1990: 1348)とある。

13 ちかによる自伝に「此時板垣伯東都にありて傳道者を高知に引かんとする相談ありしを以て、早速此相談に應じて……」(櫻井1892b: 1051)とある。板垣退助とつながる交友関係があったことを示しているが、経緯の詳細は不明である。

14 令和元年(2019)6月7日・8日に行われたピアノ、ヴァイオリン、ソプラノ演奏の教会コンサート「風のハーモニー」(大洲教会・日土教会共催)のパンフレットによる。

15 パンフレットには「中野ミツや政尾藤吉も大洲教会員でした」と続く。政尾藤吉(1871~1921年)は大洲出身で、アメリカ留学後、ジャパントイムズの記者となりシャム(現、タイ)に駐在、帰国後に立憲政友会の衆議院議員となり、駐シャム公使を勤めた人物である。

16 数年後に浪華女學校と改称され、現在は大阪女學院(中学校・高等学校・短期大学・大学)として存続している。

じたこともあったが、当時の学校の気分は親しみ易く、自分の気持ちにもびったりと合い、西洋人の先生からは語学を学び、その他特に音楽を学んだと書いている。また、ちかが従来から懇意にしていた福沢諭吉¹⁷の義弟榮之助が保証人となり、休日には純日本式の福沢家に泊りがけで遊びに行ったことがうれしかったとある（横濱共立學園六十年史編纂委員編 1933: 251）。

親元を離れてのふきの充実した女學校生活が窺えるが、この頃のちかが『女學雜誌』（315号）に投稿した（明治25年（1892）4月30日刊）、「女學生家政練習に就ての考案」は、母が娘のことを想う内容であった。記事は、女學校の卒業生は家事ができないという批判が挙がっていることに対し、普通学科の他に家政・裁縫科の履修を薦めたいというちかの意見書で、そのなかのふきに関する話題が以下である（櫻井 1892a: 1005）。

私も一人の娘がありまして、某學校へ寄宿させておきますが、所謂書生風になり、家政の事にうとくなりては困るとおもひて心配しております。去りとて地方に置ては好き學校もなく完全なる教育を受けさせるわけには行かず仕方ありませんから、毎年夏期休業中に力を盡して家政の事を教へたいとおもひます。何事も口で云ふは易き事なれども、行ふは難きものですから、私も成功を得るかどふか分かりませんが出来るだけやつて見る積りです。

ちかは、この意見が娘を女學校へ進学させた母親たちの参考になればと筆を進める。ちかが世の母親たちの模範となろうとする姿勢と、夏期休暇を共に過ごし、家事を習うふきの姿を彷彿とさせる。

続いて、同年6月11日の『女學雜誌』（320号）掲載の「女子教育に於ける經歷及經驗（第二）經驗の二三」にもふきの話題が登場していた。「親心」についての記事で、これまで他人の娘を多く預かってきたが、いざ自分の娘を他人に預けることとなって、娘を預ける親の心情が分かり、親を安心させることがいかに大事か思い直したという内容であった。

同記事には、夫昭恵が所用で横浜に行き、ふきに面会した様子を伝える手紙も掲載されており、夫の手紙の最後に「校舎の門前まで送り歸へして自分は歸路につき候節、後をふりむき見ること能はずして其場をのがれ涙をかくして歸り申候云々」とあり、「我は此書を見しとき同じ涙にくれたりき」（櫻井 1892c: 1126）と綴っている。共立女學校は母校であり教師も親しい間柄であるのに、それでも娘が心配であるという親心を体験したことで、娘が学ぶ学校の詳細を知らない他の親はいかに不安なことかと、他の親心にも配慮の行き届いた、優しい母親としてのちかの経験談であった。

この他にも、ちかは明治20年代の『女學雜誌』に多くの投稿をしており¹⁸、自伝・経験談をはじめ、当時の女子教育及び女學校のあるべき姿（男女の差がある科目・学科を改善させようとする意見など）を訴える内容が多かった。この後、ちかはアメリカでの生活を数年間経験する¹⁹。

横濱共立學園資料室にはふきの卒業記念写真が残っていた。管見によれば、ふきと確認できる写真

17 同書には福沢諭吉の娘3人と姪が共立女學校の生徒であったとの回想（横濱共立學園六十年史編纂委員編 1933: 220）がある。他にも井上馨の娘2人の名も挙がり、当時の社会に於ては相当の身分のある人たちの子女が入学した。

18 例えば「日本婦人の洋装論」（123号、明治21年8月18日）、「女子教育に於ける經歷及經驗（第一）經歷のあらまし（上）」（316号、明治25年5月7日）、「女子教育に於ける經歷及經驗（第一）經歷のあらまし（下）」（317号、明治25年5月14日）、「女學校本科の學科」（322号、明治25年7月2日）、「開書」（323号、明治25年7月16日）、「故安岡いく子の傳」（324号、明治25年7月30日）がある。

19 アメリカ滞在は渡航3回、合計4年間に亘り、第1回は明治26年（1893）～明治28年（1895）5月、第2回は明治29年（1896）より1年間、第3回は明治40年（1907）であった。



写真2：明治30年（1897）度の卒業記念写真
（横浜共立学園資料室所蔵）中央の正座がふき。

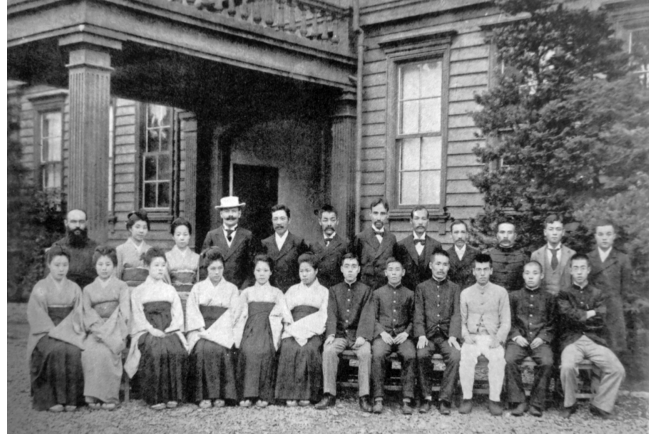


写真3：明治34年（1901）7月の東京音楽学校卒業生
（『東京芸術大学百年史』20頁より転載）

は初めてである。ふきは共立女学校で音楽の才能を見出され、卒業後、明治31年（1898）に東京音楽学校（現、東京芸術大学音楽学部）に進学しピアノを専攻、明治34年（1901）7月に卒業した（写真2・写真3）。

4. ふきの結婚生活

東京音楽学校を卒業したふきは、倉辻明義（1877～1945年、筆名 倉辻白蛇）と結婚した。明義の父明教は愛媛県大洲市出身²⁰で、明義は松山中学時代に夏目金之助（漱石）から英語を習い（櫻井1996：15）²¹、明治31年（1898）に早稲田大学英語政治科を卒業したジャーナリスト²²であった（人事興信所編1941：ク53）。

結婚した年月日は不明であるが、長男 明毅は明治36年（1903）3月13日生まれであった。倉辻夫妻には、年子で次男 龍男（明治37年（1904）生か）が誕生、三男 勇三郎（明治40年（1907）生）、四男 満洲男（明治43年（1910）生）、長女 多恵子（大正3年（1914）生）の5人の子宝に恵まれた。それぞれに楽器（長男・次男にピアノ、三男にチェロ、四男にクラリネット、長女にヴァイオリン）を習得するよう教育を施した。

この間、ふきは明治41年（1908）に東京音楽学校のピアノの時間講師に就任、明治45年（1912）

20 倉辻明教は大洲藩士であった。愛媛県に残る記録によると、明治5年（1872）当時は、神奈川県第十区第一小区（1105戸）の副区長を務めており（中山町誌編さん委員会編1996）、翌年には令教小学校の三等教官を拝命、日本における学校水泳の創始とされる指導者となり（井出2005）、明治15年（1882）には郡役所勤業係の養蚕担当であった記録（愛媛県史編さん委員会編1986：836）が残る。その後、北海道に渡ったのか、『人事興信録』には「北海道士族」（人事興信所編1941：ク53）と説明される。

21 夏目金之助（漱石）は、明治28年（1895）に松山中学に赴任、明義は松山中学5年生であった。夏目先生の布団にイナゴを突っ込んだという逸話は明義が中心となった悪戯のようで、明治39年（1906）刊行の『坊っちゃん』に書かれて広く知られるようになった（櫻井1996：18）。

22 昭和16年（1941）当時の記録には読売新聞社論説委員とあり、経歴として横浜新報主筆、万朝報記者、やまと新聞編集長、帝国新報主幹、富山日報・東京毎日新聞・二六新報・報知新聞各主筆を歴任。やまと新聞社より日英博覧会に出席し、又米国コロンビア大学に学び、バチェラー・オヴ・ローの学位を受けた（人事興信所編1941：ク53）とある。本名での『米国現大統領ルーズベルト』（1905年刊、久友社）、『児玉大将伝』（森山守次共著、1908年刊、星野暢）の著書があるが、雑誌『サンデー』（サンデー社）などには「倉辻白蛇」の筆名で論考を発表している。

に退職したとの記録がある（東京芸術大学百年史編集委員会編 1987: 7）。が、これについて、明治 40 年（1907）3 月 7 日付の読売新聞「都下女学校風聞記」には、「世間の能く知つてゐる」東京音楽学校の卒業生の結婚者に「倉辻白蛇氏に音楽学校助教授倉辻富貴子」として挙げられている記事があり、東京音楽学校の記録と異なっていた。このため、正確な就業開始年は不明であるが、子育てをしながらピアノ講師を続けていたことは事実である。その他、ジャーナリストの明義は各界の著名人との交流があるため、ふきは「政財界の重鎮たちの子女に個人教授」（櫻井 1996: 31）をしていたようである。

長男 明毅（1903～1926 年）²³ は 24 歳で急死し、同年追悼集（倉辻: 1926, 私家版）が編まれた。明毅の幼少期や性格が詳細に記されており、倉辻家の様子を知る貴重な記録であった。旧友の寄稿で、家族に関して書かれている箇所をいくつか挙げてみる。

同級生 横山三郎の追悼には、明毅はおとなしい人で、小学校のときは学校に祖父が迎えに来ていたと振り返り、小学校 2, 3 年生の頃、櫻井女塾の日曜学校のクリスマス会に招待され、そこでピアノを見事に弾く明毅に驚いた（倉辻 1926: 42～46）とある。祖父とは昭恵のことであろうか。また、ふきは幼少期から息子にピアノを触れさせていたことが分かる。

同級生 小松博一も同じく、明毅は祖父に手を引かれて通学していたと回想し、鍵盤をころころ転がる手を驚異の眼で見た思い出、ふきの紹介で学習院の先生に英語を習いに一緒に通い、明毅が非常に覚えがよくて、前に習ったことは次にはすらすらと云えて先生を驚かせたこと、文字が上手で、作文も皆の模範として先生に読まれていたこと（倉辻 1926: 48～49）など、明毅が優秀な青年であったことを書き残している。

他にも同級生 小村三千三は、明毅は外見陽気な人に見えたが、思索的な人間であったと述べ、「卒業演奏に出ないと云ひ出して、お母さんがお困りになつて居られたが、夫れも演奏に就て、君の純粹な藝術的見解から判断を下して了つたからだつた。」（倉辻 1926: 103）と回想する。さらに、櫻井女塾の卒業生 石本美佐保は、塾で英語の勉強をしていると明毅の上手なピアノが聞こえてきて心を奪われたと記し、ふきよりお嫁さんにいい人がいないかと尋ねられ、本人に好みを聞くと嫌な顔をされ、将来設計としてあと 5 年は日本で勉強し、のちドイツに行つて、30 歳までに一人前になりたいと聞いていたとあり、ふきが「明ちゃんはお本當に品行方正で真面目すぎますよ」と言っていた（倉辻 1926: 109～114）などの逸話が残っている。

同級生 田中實の追悼には、新婚の家に明毅がお米をお土産に持ってきたので、祖母ちかのレシピ本に沿つて「バタ飯」を作つたら褒めてくれたという逸話や、一家を「賢婦の誉れ高き祖母君。廣き知識と新思想に理解深き慈父慈母。華の如く優しく愛らしき四人の弟妹君。……傳來の基督教信者特有の和氣が一家に満ちてゐる。」（倉辻 1926: 94）と絶賛し、同時に早すぎる死を深く悼んでいた。長男 明毅はふきの愛情深く育つたことが分かり、愛息の早逝は、ふきにとってかなりの衝撃と深い悲しみであつたらう。

5. 女子教育者・料理研究家ちかの功績

ちかは、アメリカより帰国すると、アメリカの女子教育を取り入れた新しい学校設立準備を始め、

23 明毅は、誠之幼稚園、東京女子高等師範学校附属小学校、同高等科、東京高等師範学校附属中学校を卒業した。大正 7 年（1918）6 月に井深梶之助より洗礼を受け、大正 14 年（1925）3 月、東京音楽学校本科ピアノ科を「抜群の好成績」で卒業、研究科生となり、将来は海外留学と期待をかけられていたピアニストであったが、大正 15 年（1926）3 月に突然の結核性の腹膜炎により亡くなった（倉辻 1926: 3）。



写真4：「櫻井女塾」

(『櫻井ちか小伝』口絵より転載，明治末～大正初期頃か)



写真5：「櫻井氏の家庭」

(『家庭日常の實驗』口絵より転載，向かって右端がふさか)

明治31年(1898)に「櫻井女塾」の創立が文部省に許可された。所在地は東京の本郷区向ヶ岡弥生町であった。学校はキリスト教信仰を支柱とし、寄宿舎が併設された。学科は英語科が主であり、随意科として和漢文、裁縫、編み物、ピアノ、オルガンがあり、修業年限は英語科・予科1年、本科2年、高等科1年であった(大月編1905: 151~152)。また、ちかは数多くの女性雑誌に効率のよい家事の仕方や手軽に出来るお惣菜や西洋家庭料理の料理法を紹介するようになり、次第に櫻井女塾でも西洋料理や割烹などの科目が履修できるようになった。学校の展開については拙稿(遠藤2021)を参照されたい。本論文では、これまでの研究書には記録のなかった櫻井女塾長時代のちかの女性雑誌への寄稿を紹介する(写真4)。

明治40年(1907)発行の『女學世界』増刊号は『現代婦人成功立志談』であった。跡見花蹊(跡見学園創立者)、三輪田眞佐子(三輪田学園創立者)、瓜生繁子(岩倉使節団女子留学生)などに並んで「櫻井近子女史立志談」が掲載されており、自らの青年時代の体験談を挙げ「女子は決心が必要です」(櫻井1907: 138)と、不幸な境遇になっても諦めないことが必要であると主張した。

明治41年(1908)発行『家庭日常の實驗』(實業之日本社)の編者の天野馨(天野誠斎)による序文には、欧米には家庭改良の目的を持った集団があり、料理会・裁縫会・育児会などという名の下に一家の主婦が会員となり、定日を期して参集し、家庭問題の経験・知識を交換しており、日本でも模範的家庭の日常実験談を普く世情に紹介したい(天野1908)とあり、3回目の渡米を経験した直後のちかによる「女塾生の家族的實務」が収載された。

それによると、当時は櫻井女塾には20名ほどの寄宿生がおり、櫻井女塾から別の女学校へ通う寄宿生もいたとある。ちかは、雑巾の選び方、ランプや室内の掃除の仕方、洗濯の仕方・畳み方、お勧めの洗濯板・石鹼などを紹介し、家事の効率化を図る方法を詳述し啓発していた(天野1908: 42~60)。口絵には、模範的家庭の一例として「櫻井氏の家庭」と題した写真が掲載された(写真5)。

明治43年(1910)発行の『婦人くらぶ』2月号には、ちか著『西洋料理教科書』(紫明社)出版の

大々的な1頁全面広告と共に、櫻井女塾の参観記が掲載されていた。記者は、丸一日かけて参観したようで、経済的で誰にでも簡単に出来、かつ来客があったときに格好がつく西洋料理を学んだと、「柚子クリーム」の料理法を紹介している。効率よく料理をするちかの手さばきも報告されており、最後は皆で一緒に頂き、記者が「風味のよい結構なもの」と感動している記事であった（婦人くらぶ記者1910: 101~103）。

ちかによる料理法の紹介について、明治40年代における女性雑誌（『女學雑誌』、『女學世界』、『家庭の友』、『婦人畫報』、『婦人世界』等）への寄稿は加藤・川島論文に詳しいが、同論文にはない記録として、大正初期の雑誌『婦女界』への寄稿を挙げる。

大正4年（1915）8月の『婦女界』（12巻2号）には、「八月のお惣菜料理（豚肉と玉菜の煮込、生姜の味噌焼、昆布の梅煮などの料理法）」、同年翌月の『婦女界』（12巻3号）には、「九月のお惣菜料理（クリームキャベヂ、牛肉のハツシュ、鰯の煮付・摘み入れ・摺身のフライなどの料理法）」が紹介されていた。いずれの号にも「櫻井女塾長」との肩書きが付され、塾の宣伝も兼ねていたのか、（櫻井女塾では）「九月から新學期を設けて、家庭簡易西洋料理の講習をせらるゝさうです、詳細は同塾宛にお問合せ下さい」（『婦女界』12巻3号）との記載が記事の文末にあった。

その後、大正5年（1916）2月の『婦女界』（13巻2号）には「大根料理のいろ〜（ふろ吹大根、大根のあちやら煮、大根と剥身の煮付などの料理法）」、同年4月の『婦女界』（13巻4号）には「ソップのいろ〜（菠薐草、蛤、麥・セイゴなどのソップの料理法）」、同年7月の『婦女界』（14巻1号）には「経済的のお惣菜料理（莢隠元の胡麻和へ、茄子の酢味噌、ずいき和へなどの料理法）」など、西洋料理だけではなく、和食についての料理法も精力的に紹介した。ただ、『婦女界』への投稿は一時期であったようで、そののち、料理法紹介は亀井まき子、服部茂一などの執筆に代わっていった。料理本は『西洋料理教科書』以降、6冊出版している²⁴。

ふきは、大正2年（1913）頃より櫻井女塾の専任講師に就任し、音楽・英語を担当していたが、昭和3年（1928）12月19日のちかの死去後²⁵、櫻井女塾の2代塾長に就任した。この頃のふきについて、「不器用な我國の婦人」と題する記事を雑誌『雄辯』（昭和5年（1930））に投稿していたことが分かった。

内容は、（当時の）不景気を打開するために不経済な家庭生活を改善するための指南であった。手紙は書き損じないように下書きをすること、障子の破れや錠前の傷みなどは自分で直すことができるよう「手工教育」を重視することが家庭経済を助けると唱えており（倉辻1930: 164~165）、効率よい家事を提唱していたちかの跡を継ぐ使命感に燃えているような文面であった。

塾長となったふきは櫻井女塾の改革を進めて、昭和8年（1933）に「櫻井女子英学塾」と改称、英語中等教員無試験検定の資格の授与（櫻井編1976: 19）や校舎を本郷から板橋へ移転するなどの改革を進めたが、「昭和10年代の戦争気分は、社会一般の英語学習意欲を急速に喪失させ」（千住1982: 40）、英語教育を専門とする櫻井女子英学塾への入塾者は減少し、経営が窮地に陥っていった。そして、櫻井女子英学塾は女子教育存続のため「日本女子高等學院」に合併となった。これらの経緯の詳

24 『実用和洋惣菜料理』（1912年、實業之日本社）、『一品五銭今日の料理』（1916年、實業之日本社）、『手軽に出来る家庭西洋料理』（1916年、實業之日本社）、『三百六十五日毎日のお惣菜』（1917年、政教社）、『楽しい我が家のお料理』（1925年、實業之日本社）、『日々活用お料理辞典』（1927年、文武書院）である。

25 これより前の大正6年（1917）に夫の昭憲は亡くなっており、ちかはふき四男の満洲男を養子として迎え、櫻井家の嫡子としている。

細は拙稿（遠藤 2021）を参考されたい。

6. ふきと櫻井家のその後

日本女子高等學院の教員（藝術科）として名を連ねたふきは、昭和 20 年（1945）5 月 25 日の東京大空襲の夜、赤坂溜池の読売病院に入院していた夫 明義をリアカーに乗せて戦災避難中、行方不明となった。櫻井家を継いだふきの四男 満洲男は、一週間に及んで両親の遺体の捜索をしたが、何ら兩人と確認できるものは発見できなかった（櫻井編 1976: 20）。

戦中、櫻井一家は松本（学童疎開で長男は富山）などに疎開していたが、満洲男は終戦直前、応召して朝鮮半島に出征した。昭和 20 年（1945）8 月 6 日以降は原爆投下直後の広島にて軍務に従い、終戦後に東京に戻ってきたが、無職となった。蓄音機やレコード、クラリネットなどを質入れしながら、駐留米軍の通訳をし、のちアメリカの船会社で貨物船を就航させている日本代理店に雇われ、朝鮮戦争で特需景気となり「ポートキャプテン」として活躍した（櫻井 1996: 45～74）。

昭和 15 年（1940）に神戸で生まれ、東京で育った満洲男の次男 淳司氏は、東京都立田園調布高校 3 年生の時、従姉の倉辻啓子氏（ふきの三男 勇三郎 長女、現姓は小橋川、昭和 9 年（1934）生）と四国へ旅行した際、大洲教会を訪れ、「この教会の創立者櫻井昭恵先生の末裔にあたられる方です」との紹介を得て、曾祖父母の事績を知ることとなり心揺さぶられ、志を継承しようと東京神学大学に進学した（櫻井 1996）。

淳司氏が上梓した『櫻井ちか小伝』は、後世の櫻井ちか研究の基礎となっているが、同書には「新しい学校創設の計画について一桜井女塾再建の志を貫く一」と題した最終章（付録）がある。「桜井女塾の再建の志を抱きはじめてからすでに十数年を経過しました。」（櫻井編 1976: 1）と始まり、福島県石川町の閉校した小学校跡地に「インターナショナルニューライフカレッジ」を開校する計画書であった。

淳司氏は、東京神学大学卒業後、同大学院に進学、基督教児童福祉施設を経て、成美学園（現、青山学院横浜英和中学高等学校）聖書科で教鞭を執った。成美学園に勤務してから 5 年後、洗礼を受けてくれた石川町出身の溝井芳清牧師から空き校舎の情報を得ると成美学園を退職し、石川町に移住して英語塾を開塾、昭和 53 年（1978）に「ニューライフカレッジ」を創立した。開校式では 3 名の新入生に対し、来賓が 35 名いたようで、曾祖母の櫻井女塾の再建を目指すことが宣言され、「寄宿」を大切にしたい櫻井女塾のような「全寮制私塾」であった（櫻井 1993）。

入塾者は、当初は福島県立福島中央高校の通信制を受講することで「高卒」の資格を取得させ、小児麻痺の後遺症のため高校進学できない塾生をはじめ、既存の高校に魅力を感じない塾生などが集まった。それは、決して既存の学校制度への抗議や不足を補うための教育の場ではなく、「あるがままの姿の他者を受容することのできる器量ある人間形成を目指し、新しい生命力を創造する」という方針であった。開校のニュースは、当時のメディアに多く取り上げられたようで、全国規模で入塾希望者があり、翌年には 15 名の塾生、教授陣も増え（講師 7 名、内 常勤 4 名）となり、塾には教会や大学からの視察があったり、淳司氏は全国を廻り牧師として教育講演を行ったりした（櫻井 1993）。平成 20 年（2008）の記録では 145 名の卒業生を輩出した（櫻井 2008）。

令和 2 年（2020）7 月 19 日、石川町在住の淳司氏に遠隔にて御話を伺った。そのときには塾生はいなかったが、櫻井ちかの胸像（塑像制作年未確認、櫻井 1993 に写真在り）が安置されていた。同塾には



写真6：櫻井淳司氏近影とちかの胸像



櫻井淳司氏書斎

(福島県石川町，令和2(2020)年7月19日：遠藤教之氏撮影)

多くの書籍が所蔵されており，昭和女子大学や女子学院（櫻井女学校の後身）の記念誌など，女子教育関連の書籍も多数架蔵されていた。「創立70周年記念式典（1990年）に招待され，人見楠郎先生に昭和女子大学の構内を案内してもらったことがある」などを伺ったことは貴重であった（写真6）。

7. おわりに

本論文で明らかになった「倉辻ふき」の経歴を末尾の年表にまとめる。また参考に家系図を付す。ふきの養母は，明治初期に日本人による最初のキリスト教主義の櫻井女学校を創立した「女子教育者」の「櫻井ちか」であった。幼少期は両親の伝道に寄り添って過ごしていたが，12歳で共立女学校の寄宿舎に入り，18歳まで過ごした。母のアメリカ遊学の時期も同校で過ごしていた。

東京音楽学校を卒業後，すぐに結婚したが，母の活動を見て育ったふきは，自身も同じく子育てをしながら「女子教育者」として活動するようになる。母は，寄宿舎を併設した「櫻井女塾」を創立し，さらに女性雑誌に女子教育や子育てに関する意見や効率よい家事の方法，料理法を紹介しており，当時を生きる女性の理想となるような著名な教育者・料理研究家で在り続けた。すなわち，女性の立場からいかに女性が快適により良く過ごせるかを，アメリカをはじめとする欧米の文化や実体験から学び，それを日本女性に伝えることに信念を持っていた。ふきは，そのような母の教育活動を生涯に亘って支え，母の跡を継ぎ2代目の塾長となり，自身も当時の女性の模範になろうと奮闘していく。

また，母と同じく英語を教授する技能があったが，その他のふき自身の特技としてピアノを極めており，当時の政財界の子女にピアノを教え，また東京音楽学校，櫻井女塾（櫻井女子英学塾），日本女子高等学院にて藝術科の教員として教鞭を執るなど，生涯を通して音楽と関わり続けた。

音楽に関しては，5人の子女全員に楽器を習わせており，母としての家庭教育の方針も窺うことができた。長男 明毅に関わる記録からは，祖父 昭恵が孫（ふき 息子）の小学校の送り迎えをする日常や，櫻井女塾の塾生と倉辻家・櫻井家の一家が親しい関係で過ごしていたこと，息子にピアノを熱心に教え体得させようと励む母親の姿があった。

また，現在の櫻井家は福島県石川町で過ごしており，ふきの孫の淳司氏は櫻井女塾の再建を目指したことが確かめられた。同じくふきの孫にあたる倉辻明男氏（昭和26年（1951）生，ふきの三男 勇三郎の長男）には，生前の倉辻夫妻は日本キリスト教団富士見町教会に所属していたと伺った。戦後生まれの明男氏は，昭和女子大学附属昭和小学校の第6回卒業生であった。聖アンデレ教会の教会報（『さかえ』367号，2020年6月）に明男氏の寄稿があるように，ふきの孫たちは現在も信仰を大切にしている。

本論文の調査中、ちか・ふきの母校である共立女学校、現在の横浜共立学園と昭和女子大学の関係について、横浜共立学園資料室の荒木美智子氏より伺った。

昭和16年(1941)3月より50年以上、横浜共立学園の校長であった第6代 神保勝世校長(1902~1994年)は「人見楠郎先生と阿佐ヶ谷の教会を通して懇意になさっていた」とのことであった。人見楠郎学長(1916~2000年)は、昭和16年(1941)3月に東京帝国大学を卒業し、昭和21年(1946)より昭和高等女学校に勤務、昭和57年(1982)から平成12年(2000)まで昭和女子大学第5代学長であった。神保校長と人見学長は故人となり、共に関わりのあった「櫻井女塾」関連のことについて伺うことはできないが、お二人は、同時期、それも長い間、互いに女子教育の発展に奮励された間柄であり、深い繋がりがあったことが推察できる。

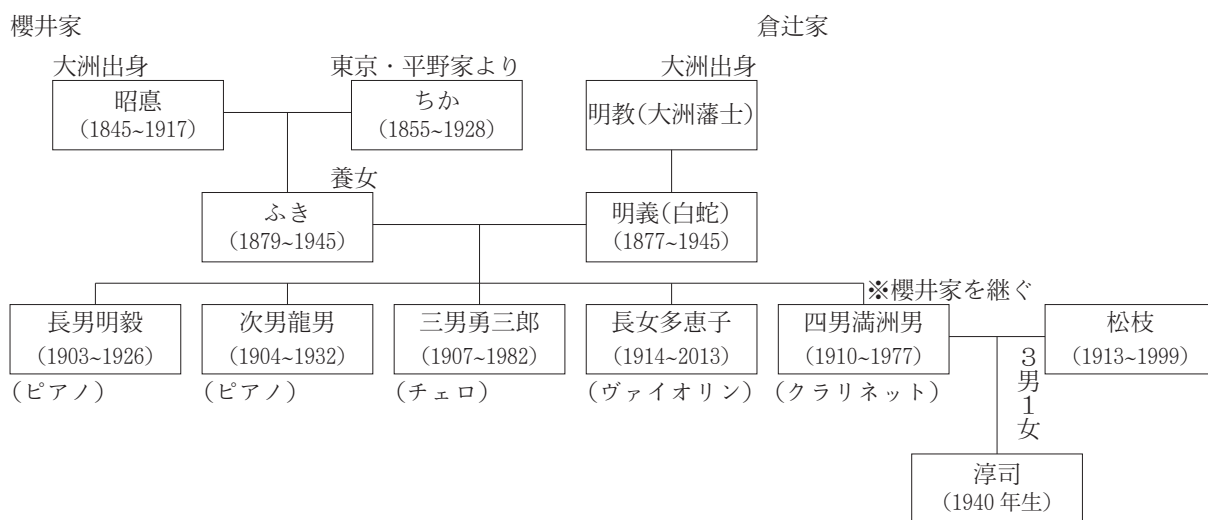
今回の調査により、女子教育者櫻井ちかの経歴がより判然とし、また倉辻ふきという女子教育者を発掘することができた。本学の前身である日本女子高等學院の教育に貢献した教職員でもあったふきは、昭和女子大学の「先哲之碑」に合葬されている(昭和女子大学七十年史編集委員会編1990:712)。

筆者は、櫻井女塾(櫻井女子英学塾)と日本女子高等學院の合併は、昭和16年(1941)であったと確定した(遠藤2021:7~8)が、この一連の調査及び本論文の調査で、女子教育または近代教育に携わった人々の繋がり、明治大正期以降を生き抜いた女性の思想や生き方を深く知ることとなった。歴史に埋もれた人物を掘り起こすことは、過去より連綿と繋がっている現代社会の様相を知る重要な作業であると認識した。

記録に刻まなければ、歴史は記憶されない。今後も史料の発掘調査作業を続け、これまで知られていなかった人物像を探り、近代以降の多様な生き方を、特に女性に焦点をあてて明らかにし、記録に残していきたい。

【付記】

本論文を作成するにあたり、荒木美智子氏、倉辻明男氏、櫻井淳司氏、下条裕章氏(聖アンデレ教会)、昭和女子大学図書館に大変お世話になりました。記して御礼申し上げます。



【家系図】 筆者作図。ふきの子が習得した楽器を記載した。

倉辻ふき 関連年表

和暦	西暦	月 日	ふき年 齢目安	出 来 事
弘化2年	1845			櫻井昭恵, 伊予国喜多郡若宮村(現, 愛媛県大洲市若宮)に誕生。
安政2年	1855	4月4日		ちか, 江戸日本橋(現, 東京都)の平野家に誕生。
明治5年	1872			昭恵・ちか, 結婚。
明治9年	1876	10月14日		ちか, 櫻井女學校を創立(ちか21歳)。
明治11年	1878	7月		ちか, 貧學校を開校(明治13年4月6日閉校)。
明治12年	1879	12月15日	0歳	宮城家の次女として誕生。 櫻井昭恵・ちか夫妻の養女となる。
明治13年	1880	4月	1歳	ちか, 櫻井女學校附属幼稚園を創立。
明治14年	1881	7月	2歳	ちか, 櫻井女學校, 矢島楯子へ委譲。 櫻井一家, 函館へ渡る。 ちか, 函館師範學校に勤務。 昭恵, 講義所にて伝道。
明治17年	1884	暮	5歳	櫻井一家, 高知に移住, 布教。
明治18年	1885	春	6歳	櫻井一家, 昭恵の郷里・松山に移住。
明治19年	1886		7歳	ちか, 大坂一致女學校の創立に協力。
明治20年	1887		8歳	昭恵, 松山に大洲教會を設立。
明治23年	1890	暮	11歳	昭恵・ちか, 福井県敦賀に転属。 共立女學校に入学(寄宿生)。
明治26年	1893		14歳	ちか, アメリカへ遊学(2年間)
明治29年	1896		17歳	ちか, アメリカへ遊学(1年間)
明治31年	1898	4月	19歳	ちか, 櫻井女塾(本郷区向ヶ岡弥生町)を創立(ちか43歳)。 共立女學校を卒業後, 東京音樂學校に入学。
明治34年	1901	7月	22歳	東京音樂學校を卒業。
明治30年代				倉辻明義(明治10年生)と結婚。
明治36年	1903	3月13日	24歳	長男明毅誕生。
明治37年	1904		25歳	次男龍男誕生。
明治40年	1907	9月	28歳	三男勇三郎誕生。 ちか, アメリカへ遊学。
明治41年	1908	推定	29歳	東京音樂學校講師(ピアノ)に就任。
明治43年	1910	2月	31歳	四男満洲男誕生。
明治45年	1912		33歳	東京音樂學校を退職。
大正2年	1913		34歳	櫻井女塾教授(英語・音楽担当)専務となる。
大正3年	1914		35歳	長女多恵子誕生。
大正6年	1917		38歳	昭恵, 死去(72歳)。
大正15年	1926	3月	47歳	長男明毅, 死去(24歳)。
昭和3年	1928	12月19日	49歳	ちか, 死去(73歳)。
昭和4年	1929	2月	50歳	櫻井女塾長となる。
昭和5年	1930	4月	51歳	櫻井女塾に高等師範科を新設。
昭和6年頃	1931		52歳	櫻井女塾に小学校英語科の専科正教員資格が与えられる。
昭和8年	1933		54歳	櫻井女子英学塾と改称。
昭和9年	1934	7月	55歳	孫啓子誕生(勇三郎長女)。
昭和10年	1935		56歳	櫻井女子英学塾(高等師範科)に文部省英語中等教員無試験検定の資格が与えられる。
昭和12年	1937		58歳	櫻井女子英学塾, 板橋の新校舎に移転。
昭和15年	1940	7月27日	61歳	孫淳司(満洲男次男)誕生。
昭和16年	1941		62歳	櫻井女子英学塾, 日本女子高等學院と合併。 日本女子高等學院で藝術(ピアノ)を担当。
昭和20年	1945	3月10日	66歳	東京大空襲で夫明義が負傷。
		5月25日		戦災避難中, 夫と共に行方不明になる(死去)。
		9月		日本女子高等學院主催の追悼会を万昌院(中野区高田)で施行。

【出典】複数の文献を参照し, 筆者作成

【引用文献】

- 天野馨 1908『家庭日常の實驗』實業之日本社。
- 井出隣之 2005『愛媛県指定文化財 大洲神伝流保存会によるシリーズ 大洲発祥の神伝流泳法⑧』『広報おおず』9月号 大洲市役所。
- 愛媛県史編さん委員会編 1986『愛媛県史 社会経済 1 農林水産』愛媛県。
- 遠藤由紀子 2021「明治 31 年創立「櫻井女塾」に関する研究—日本女子高等學院との合併、戦前の英語教育など—」『女性文化研究所紀要』48号 1~16頁。
- 大月久子編 1905『新撰東京女子遊學案内』文學同志會。
- 加藤澄江・川島麻由美 1987「明治期の女性による食物教育・食生活啓蒙論」『女性文化研究所紀要』創刊号 42~55頁。
- 倉辻龍男 1926『故倉辻明毅追悼集』倉辻龍男。
- 倉辻ふき 1930「不器用な我國の婦人」『雄辯』21巻6号 大日本雄弁會講談社 164~165頁。
- 小林恵子 1981「草創期の幼稚園と女子教育に関する一考察—横浜のミッション・ホームを中心に—」『日本教育学会大会研究発表要項』40 30頁。
- 小林恵子 1982「日本における最初の私立幼稚園とその背景(5) 桜井ちかと桜井女学校附属幼稚園」『幼児の教育』81巻8号 33~43頁。
- 櫻井淳司編 1976『櫻井ちか小伝—櫻井女塾の歴史—』私家版(櫻井女子英学塾塾友会)。
- 櫻井淳司 1993『ニューライフカレッジ—志教育脱学校めざして—』燦葉出版社。
- 櫻井淳司 1996『夢を抱きて荒野をゆく—いのちの教育の泉を追い求めて—』インターナショナルニューライフカレッジ出版部。
- 櫻井淳司 2008『夢に抱かれて楽天無窮道をゆく』燦葉出版社。
- 櫻井ちか子 1892a「女學生家政練習に就ての考案」『女學雜誌』315号 女學雜誌社。
- 櫻井ちか子 1892b「女子教育に於ける經歷及經驗(第一) 經歷のあらまし(下)」『女學雜誌』317号 女學雜誌社。
- 櫻井ちか子 1892c「女子教育に於ける經歷及經驗(第二) 經驗の二三」『女學雜誌』320号 女學雜誌社。
- 櫻井近子 1907「櫻井近子女史立志談」『女學世界』第7巻第9号(増刊『現代婦人成功立志談』) 博文館。
- 櫻井ちか子 1928「英語を學んだ時の苦心」『女子學院五十年史』女子學院同窓會。
- 昭和女子大学七十年史編集委員会編 1990『昭和女子大学七十年史』昭和女子大学。
- 人事興信所編 1941『人事興信録』第13版(昭和16年)上 人事興信所。
- 千住克己 1982「櫻井ちか研究ノート」『静岡女子短期大学研究紀要』30号 29~44頁。
- 塚本八重子編 1941『光葉』6月号 日本女子高等學院光葉會(發行人 保坂都)。
- 手塚竜磨 1967「横浜と初期プロテスタント系女子学校」『英学史研究』第9号 11~21頁。
- 東京芸術大学百年史編集委員会編 1987『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇第1巻 音楽之友社。
- 東京都編 1961『東京の女子教育』都史紀要9 東京都。
- 東京都編 1968『東京の各種学校』都史紀要17 東京都。
- 東京都編 1969『東京の女子大学』都史紀要18 東京都。
- 中山町誌編さん委員会編 1996『新編中山町誌』(データベース「えひめの記憶」, 1965年刊『中山町誌』の再編集)。
- 函館市史編さん室編 1990『函館市史 通説編 第2巻』函館市。
- 婦人くらぶ記者 1910「綺麗な西洋料理 櫻井女塾の參觀記」『婦人くらぶ』第3号第2巻 紫明社。
- 守屋東 1923『矢島楯子』婦人新報社。
- 『横浜共立学園の120年』編集委員会編 1991『横浜共立学園の120年: 1871-1991』横浜共立学園。
- 『横浜共立学園120年の歩み』編集委員会編 1991『横浜共立学園120年の歩み』横浜共立学園。
- 横濱共立學園六十年史編纂委員編 1933『横濱共立學園六十年史』横濱共立學園六十年史編纂委員。

(えんどう ゆきこ 歴史文化学科)